

【資料】

キュプリアヌス著『ドナートゥスに送る』  
——神の恵みと回心について——  
CYPRIANUS, AD DONATUM  
——解説と翻訳と注解——

吉 田 聖

目 次

I. 解説

1. 本書の題名：Ad Donatum『ドナートゥスに送る』について
2. Donatus ドナートゥスという人物について
3. 本書の作成目的，著作の時期等について
  - 1) 本書の作成目的
  - 2) 著作の時期
  - 3) キュプリアヌスの略歴

II. 翻訳

キュプリアヌス著『ドナートゥスに送る』——神の恵みと回心について——

1. 序言。本書の作成目的は過去に約束したことを実行するため
2. 豊かな実りをもたらす神の恵みによって聴き分けるように
3. 自分の過去，とくに洗礼前後のありさまを振り返ってみると……
4. 第二の誕生（洗礼）による内面的変化について
5. 豊かにほとばしり出る聖霊の力と効果について
6. 真理の光によって，現実をよく眺めてごらん下さい
7. 目の欲を楽しませる剣闘士の試合，人殺しを眺めに来る家族も殺害者
8. 劇場で演じる俳優の不道德な行為，数々の悪行
9. 羞恥心のある者には耐えられないことが行われている
10. 公共広場での悪行の数々も何の恥じらいもなく……
11. へつらう者の悪意の毒が隠されている

12. 裕福な者は絶えざる不安におびえている
13. 高位につく権力者の抱いている恐れ
14. 神の賜物である再生の恵み、そのありさまと喜びについて
15. 激励の言葉
16. 結び。救いの喜びのうちに過ごそう！

### III. 結びにかえて

1. 本書の今日的な意義について
2. 大聖年にカトリック教会が過去 2000 年間に犯した過ちを謝罪
3. 大聖年 2000 年のローマの復活徹夜祭の洗礼式
4. 日本の教会における復活徹夜祭の洗礼式

## I. 解説

### 1. 本書の題名：Ad Donatum 『ドナトゥスに送る』について

本書のラテン語原文(CSEL)の脚注によれば、本書の題名は写本により、いろいろと異なっている。例えば、11世紀のB写本(codex Bambergensis 476)によると——Caecilii Cypriani epistola ad Donatum incipit. 「カエキリウス・キュプリアヌスのドナトゥス宛の手紙の始め」——と、「手紙」という単語が明記されているが、複数の写本(略語 W. P. M.)には「手紙」という単語は記載されていない。

このことからキュプリアヌスの著作を教書と手紙に大別する場合、本書は、オックスフォード版では教書扱いに、他の版では手紙扱いにされている。また、1682年のOxon.写本には、ad Donatum de gratia Dei「ドナトゥスに送る、神の恵みについて」と、テーマ付のものもある。そこで、今回の翻訳に際しては、神の恵みとその具体的な内容である回心を明示するために通常の題名とされている『ドナトゥスに送る』と共に「神の恵みと回心について」を副題として付記することにした。

今回、翻訳の底本として、Sancti Thasci Caecilii Cypriani Opera Omnia, recensuit et commentario critico instruxit Guilelimus Hartel (Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum, vol. III, pars I) Vindobonae

1868, pp. 1～15 を使用した。なお各章の見出しは底本にはないが、訳者が内容に従って補った。

## 2. Donatus ドナートゥスという人物について

ドナートゥスという人物は、キュプリアヌスの全著作中、本書に2回(第1章, 第16章, いずれも, *Donate carissime* 「最愛のドナートゥスよ」という呼格形で登場するだけである。そこで, どういう人物かを辞典等で調べてみた。この名前の人物は教会史上, 8名いることが分かった。

1) ドイツ語の『神学・教会辞典』<sup>1)</sup>には, Donatus ドナートゥスという人名項目に6名掲載されている。

- ① 聖人(11世紀, イタリアの Arezzo アレッツォの司教, 8月7日記念)
- ② 聖人(7世紀, フランスの Besancon ブザンソンの司教, 8月7日記念)
- ③ 聖人(9世紀, イタリアの Fiesole フィエゾーレの司教。アイルランド出身, 10月22日記念)
- ④ 聖人(4世紀, エジプトの司教, 5月22日記念)
- ⑤ 貴族, 諸国の公使, 大使(16世紀, イタリアのヴェネチア出身)
- ⑥ 対立司教(4世紀, アフリカ北部のカルタゴの対立司教[在位313～347])。ドナトゥス派, またはドナティヌス派の名前の由来となっている人物<sup>2)</sup>。

この⑥番目の人物は, キュプリアヌスの時代に一番近いので同一人物と見做されそうであるが, 実はキュプリアヌスはすでに西暦258年9月14日に殉教しているので, 該当しない。結局, ここに掲載されていたドナートゥスは, 6人とも本書の該当者ではない。

2) 英語版『オックスフォード古典辞典』<sup>3)</sup>には, さらに2名の別なドナートゥスという人物がかなり詳しく掲載されている。名前と職業等を紹介する(筆者が⑦⑧と整理番号を付けた)。

- ⑦ Donatus Aelius ドナートゥス・アエリウス。4世紀, ローマの文法学者。著書——*Ars grammatica*(『ラテン語文法』全2巻)は中世ヨーロッパ

パにおいて文法の教科書として使用され、後にはただ donat（または donet）と呼ばれ、文法書と同義語になった。

- ⑧ Donatus Tiberius Claudius ドナートゥス・ティベリウス・クラウディウス。4 世紀後半～5 世紀前半、ヴェルギリウスの叙事詩 Aeneis『アエネイス』の注釈家。

内容からみて明らかなように、この二人も本書に登場するドナートゥスとは違う。キュプリアヌス関連の解説書にも、簡潔にキュプリアヌスの「友人」というコメントが一言付いているだけで、結局、詳細は不明ということになる。

### 3. 本書の作成目的、著作の時期、略歴等について

#### 1) 本書の作成目的

本文中にも言及されている通り、キュプリアヌスがかねてより約束していたことを実行するために、友人ドナートゥス宛てに書いたものである(第 1 章、冒頭の部分参照)。ぶどうの収穫期を迎えた秋の静かな田舎の家で、二人が出会い、くつろいで、ドナートゥスがキュプリアヌスの話を傾聴している場面設定になっている。私はキュプリアヌスの著作を本書を含めてすでに合計 10 件翻訳してきたが、このような親しみをこめた場面設定が記されているのは、今回が初めてである。

#### 2) この著作の作成時期について

キュプリアヌスが回心してカトリック教会の洗礼を受けた直後、すなわち西暦 246 年頃とされている。そこで本書の理解を深めるために、当時「一大事件」とまで呼ばれた彼の洗礼に至る道行きと、その後の生活を簡単に振り返っておきたいと思う。

#### 3) キュプリアヌスの略歴<sup>4)</sup>

フル・ネームはタスキウス・カエキリウス・キュプリアヌス (Thascius

Caecilius Cyprianus, 200/210? ~258)。3世紀の初め頃、アフリカ北部の大都市カルタゴ（今日のチュニジア）に生まれたが、正確な生年も、少年時代についても知られていない。両親はキリスト教徒ではなかった。裕福だったので、彼は当時の最高の教育を受け、修辞学の教師と弁護士になり、アフリカ第一の都市カルタゴの社交界で著名人と交際し、尊敬の的になった。しかし名誉や財産に恵まれながらも、心の虚しさを隠し切れず、やがてキリスト教の研究に専念し始める。

彼の回心は、司祭カエキリウス Caecilius との出会いと感化に負うところが大きく、後にその名前をもらって上述の通り、タスキウス・カエキリウス・キュプリアヌスと名乗るようになった。246年頃に洗礼を受け、一心に福音の掟に従うようになった。財産の大半を貧者に施し、世俗的な学問に仕える代わりに、聖書とキリスト教作家の研究に没頭した。回心後まもなく司祭に叙階され、さらに248年か249年の初め頃、キリスト教徒の推薦の声によって、カルタゴの司教に選任され、数々の教書を著して熱心に司教職の遂行に努めた<sup>5)</sup>。

アマン著『教父たち』によれば、このたびの青年キュプリアヌスの回心は、当時のカルタゴ市内では一つの事件であった。その回心は根本的であり、かつ全体的であった。

キュプリアヌスは物事を決して中途半端にはしなかった。世俗の文学を断念し、質素な生活を送り、聖書朗読と先輩のテルトゥリアヌスの文献研究に専念した。世俗の文学作品を拒絶したので、実際、キュプリアヌスの著作<sup>6)</sup>にはローマ文学古典等から、どこにもその引用がなされていない。司教職を約10年間つとめた後、258年9月14日、カルタゴの近くで斬首され、アフリカの最初の司教殉教者となった。

教会暦では、9月14日は十字架称賛の祝日のため、2日後の9月16日が聖コルネリオ教皇と聖キュプリアヌスの司教殉教者の記念日とされている。

## II. 翻訳 キュプリアヌス著『ドナートゥスに送る』 ——神の恵みと回心について——

### 第1章 序言。本書の作成目的は過去に約束したことを実行するため

親愛なるドナートゥスよ、よく思い出させてくれました。というのも、私は約束したことを覚えていますし、また、あの約束したことを果たすのにちょうどよい季節となりました。ぶどうの収穫の時期を迎えて、心は落ち着いた静けさに憩い、1年間の〔労働の〕疲れののちに、毎年、規則的な休息が得られるからです。それに、この場所もこの時期にかなっており、心を穏やかにしてくれる秋のそよ風とともに、この庭園の素晴らしい眺めが見事に調和しています。このような場所で団欒のうちに時を過ごすことは、楽しいことです。そして、〔聖書の中の〕「譬え話」によって神の戒めを悟るように、内なる良心を鍛えることも、また楽しいことです。世間の人々が割り込んできて私たちの話を邪魔しないように、また家族の人々が遠慮なしに騒がしい叫び声をあげて妨げたりしないように、この〔静かな〕田舎の家を訪ねることにしましょう。〔ここでは〕周りの茂みが静かな場所を保証してくれます。あちこちに伸びて曲がりくねったぶどうの蔓が支柱にまつわり着いて、ぶどうの木と葉の生い茂った隠れ家を提供してくれます。

ここでは、勉強のために互いに耳を傾けます。木々やぶどうを眺めると、その好ましい景色は目を楽ませてください。その間にも、聞いている事柄は魂を教え導き、見ている事柄は同時に喜びを与えます。今あなたにとって気に入ること、関心のあること、それは私の話だけです。あなたはこのすばらしい景色を眺めたい欲求を軽んじて、私に目を注ぎ、口も心もすべてを集中させて、持っている愛の心で完全な傾聴者となっています。

## 第2章 豊かな実りをもたらす神の恵みによって聴き分けるように

しかしながら、私からあなたの心に到達するのは、どのような事柄であり、またどの程度なのでしょう。私のとぼしい才能の、ほどほどの知識では、そこそこの実りしか生じないでしょう。肥沃な土地がもたらすような豊かな実りで、その枝が、たわわに垂れ下がることなど決してないでしょうが、とにかく持っている力の限りを尽くして、このことに着手しましょう。というのも、この度の話の題材も、私が話すのを助けてくれるからです。

法廷（人民集会）において、すばらしい弁舌は流暢なへつらいを伴って誇張されますが、主（キリスト）について、また神について語る言葉、つまり、信仰を論証するための純粋な（言葉の飾りのない）誠実さは、雄弁の力ではなく、事実に基づくものなのです。ですから、雄弁な事柄ではなく、勇敢な事柄を受け入れてください。そしてまた、聴衆を魅了する洗練された話術による言葉ではなく、神の憐れみを宣言するための、素朴な真実に基づく単純な言葉を受け入れてください。学びとる前に、感じることを受けとめてください。また長い時間をかけた研究によってかき集められた事柄ではなく、豊かな実りをもたらす神の恵みの近道〔助け〕によって、〔話の泉から〕汲み取る〔聴き分ける〕ようにしてください。

## 第3章 自分の過去、とくに洗礼前後のありさまを振り返ってみると……

私はかつて暗闇の中を、しかも闇夜の中をさまよっていた時、うぬぼれるこの世の荒波にゆられながら、おぼつかない足取りであちこちさまよい、自分の人生の意味を知らず、真理と光(の道)から遠ざかってかけずり回っていましたが、その時の私はあのような生き方からすれば、人は新たに生まれることが出来るということ、即ち、私の救いのために神の憐れみが約束されているなどということは、難しくて厄介なことに思われました。というのも、救いの水に洗われ、新しいいのちに生かされ、かつてあったものを脱ぎ捨て、身体の組織がそのまま存続しながら、心と精神面から人は

変えられるというのですから……。そこで私は言いました。どうしてそのような回心が可能なのでしょうか？ 生まれつき備わっている体の衰えからくる硬直箇所や、長い歳月をかけて使ってきたことで体に付着したものを、突然、しかも完全に脱ぎ捨てるほどの、それほど大きな変化がどうして出来るのでしょうか？ こうしたものは私たちの内部の深い根によって固定してしまっているからです。華やかな饗宴と飽食に慣れてしまった者は、いつ質素・儉約を学ぶのでしょうか？ また高価な衣服によって人目を引き、金色や深紅色の衣服できらびやかに輝いていた者が、いつ普通の、地味な服に身を包むようになるのでしょうか？ ファスキス（fascis. ローマ執政官の権標）を手にし高官職の榮譽を喜びとしていた者が、私人となり名誉もなくしてしまうことなどできません。被保護民の群れに囲まれ、行列をなすような大勢の勤勉な随行者に尊敬されていた者が、たった一人であることになれば、それは処罰されたと思うでしょう。今までそうであったように、しつこい誘惑にいざなわれるのは必定です。飲酒欲はいざない、傲慢はふくれあがり、怒りは燃え上がり、貪欲は心を安らかにさせず、残虐なことが刺激を与え、功名心が喜ばせ、情欲が破滅へと駆り立てるので

#### 第4章 第二の誕生（洗礼）による内面的変化について

以上の事柄は、私自身、たびたび考えたことです。というのも、私自身、以前の生活の多くの誤りに混乱しながら繋がれ、そこから逃れることが出来るとは信じなかったからです。そのように私はこびりついてしまった悪徳に身を委ねてしまい、より良きものへのあきらめの中で、自分の悪癖を自分の所有物や自分の家で生まれた奴隷のように寵遇してきました。

しかし、生命を授ける水の助けによって、以前の生活の汚れは洗い流され、あがなわれ清められた心には上から光りが注がれました。天からの霊を吸い、第二の誕生（洗礼の秘跡）が私を新しい人に変えてからは、不思議な方法で、疑っていたことはたちまち確実なものとなり、閉ざされてい



たものは開かれ、暗闇に包まれていたものは明るくなり、以前には難しいと思われていたことが可能となり、不可能と思われていたことが実現可能になったのです。つまり、肉に生まれ、罪の奴隷として生きてきた者は、地上的、現世的なものであったことを(悟り)、そしてまた今や聖霊によって生かされた者は、神のものとなり始めたことも悟ったのです。このように罪による死が何を私たちから取り去り、徳による生命が何をもたらしたかを、あなたはよくご存じであり、私と同じように思い出すことでしょう。あなたはこのことについては自分自身で知っているのです、私は何も申しません。自己賞賛には、憎悪すべき法螺(ほら)があるものです。人間の功德に帰せられることがないものすべてが、法螺であるということは出来ません。感謝されることはありますが、それは神の賜物について讃えられているのです。

今や罪を犯さなくなったのは信仰のおかげであり、かつて罪を犯したことは人間の過ちであったのです。私は言います、私たちが出来ることはすべて神によるものです、と。神により、私たちは生きています。神により、私たちは力を発揮します。神により、私たちは生命力を授かり保持することによって、今ここに存在しながら将来のしるしを予め知るのです。ですから、恐れだけが、清廉潔白の守り手となりますように！ 主(キリスト)が天の恵みをもって近づきながら、私たちの心に慈悲深く(神の恵みを)注がれますように！ また喜ばしい心の宿の中で、正しい(服従の)わざが保たれますように！ いただいた安全で確実なことが、不注意なことを招くようなことがかないように！ そして古い敵が再び忍び込むことがないように！

## 第5章 豊かにほとばしり出る聖霊の力と効果について

確かなことですが、もしもあなたがこの清廉潔白な道、正義の道を確認したる歩みをもってはずれないように保つならば、そしてまた、心を尽くし力を尽くして、すでにそうあり始めたことを、即ち、神により頼むことを

続けるならば、その時、霊的な恵みの増加の程度に応じて、あなたには自由（の力）が与えられるでしょう。というのも、神からの賜物に関しては、この世の寵遇の習慣とは異なり、どんな量りも尺度もないからです。つまり、豊かにほとぼしり出る聖霊は、いかなる囲いによっても狭められることなく、また閉ざされた柵によって仕切られた場所にも、閉じ込められることなどありません。聖霊は絶えずほとぼしり出ます、聖霊はあふれ出るのです。ただ私たちの心が渴きを覚え、空っぽになっていなければいけません。私たちは信仰の受容力をもってそこ（聖霊の泉）に赴く程度に応じて、あふれる恵みを汲み取るのです。そこからやがて力が与えられます。それは、慎み深い貞潔、健全な精神、真実な話を伴った力です。この力は苦悩する者を治療する際に、その害毒を消滅させることができ、また愚かな人々の魂の汚れを清めて健康を取戻します。争い好きな者には和平を命じ、暴力を振るう者には冷静沈着さを、凶暴な者には柔和を命じます。また人々を征服しようとして侵入して来る汚れた、さまよえる悪霊に対しては強い叱責の言葉でもって告白を強い、撤退するよう厳しい鞭打ちをもって迫ります。さらに、反抗し、悲嘆にくれ、慨嘆する悪霊は苦痛をますます増やし、鞭打ち、火をもって苦しめるのです。こういうことがそこで行われていても、私たちの目には見えません。受けた傷は隠されていますが、その苦しみは現れ出しています。私たちはすでにそうあり始めた状態からして、すでにいただいている聖霊がその力を発揮されます。しかし、私たちの体もその五体もまだ変わっていないために、今もお肉体的な視覚はこの世の雲によって曇らされているのです。この精神の権能は何と大きなもののでしょうか、またその能力は何と大きなものなのでしょうか——自らこの世の腐敗した接触から遠ざかっているだけでなく、購われて清められた者は、攻撃してくる敵の如何なる汚れにも捕らわれずに、かえって、その力によって、より大きなもの、より強いものとなり、荒れ狂う敵対者の全軍に対して、全権をもって指揮し統治するほどなのです。

## 第6章 真理の光によって、現実をよく眺めてごらんなさい

さらにまた、真理がよりいっそう明示され、神の賜物のしるしが光り輝くために、私は認識するための光をあなたに与えましょう。悪の暗闇を追い払い、覆われたこの世の闇を私は暴いてみせましょう。さて、あなたは、険しい山のそびえ立つ頂上に引き上げられていると、しばしらく考えてみてください。そこから眼下に横たわっている物の有り様を見てごらんなさい。そして目をあちらこちらに向けながら、自分はこの世の接触を免れて自由の身になって、さかまくこの世の渦巻きを眺めてごらんなさい。あなたはこの世に同情を覚えると同時に、自分自身についても忠告を受けて、いっそう神に感謝し、すでに（この世から）逃れ出たことを大いに喜びぶことでしょう。考えてごらんなさい、あなたの行く道は強盗にふさがれ、海は海賊に占拠され、至るところに戦争が広がって血染めの戦慄におのいています。全地は相互の流血の惨事により、じっとりと湿っています。一人が犯す人殺しは、罪悪ですが、国家の名の下に行われた[大量殺人の]場合は、勇気と呼ばれています。極悪な犯罪者が処罰を受けないのは、無罪であるという理由からではなく、残酷の大きさの故なのです。

## 第7章 目の欲を楽しませる剣闘士の試合、人殺しを眺めに来る家族も殺害者

今やあなたの目と顔を町そのものに向けるならば、どんな孤独よりも悲しい雑踏を見出すことでしょう。そして流血を伴う剣闘士の試合が残酷な目の欲を楽しませるために準備されています。体は食物によって、より強い力に満たされ、肥った者は処罰によるよりも高価に命を落とすために、五体の強い部分の筋肉によって肥満しているのです。人の楽しみのために、人が殺されています。そして人殺しのできる者がいると、その人は腕がたち、経験豊富で、技能あり、とされるのです。こうして、ただ犯罪行為が行われるだけでなく、[未知の者にも]教えられているのです。これ以上に非人間的なこと、これ以上に残酷なことが何か言えるのでしょうか。人を

抹殺できるようになること、それが訓練であり、また実際に抹殺したこと、それが榮譽になるのです。私はあなたにお願いしますが、熟年に達し、十分均整の取れた容姿の持ち主で、高価な衣服を身につけた人々が、誰にも処罰されていないのに、猛獣のもとに身を投ずるならば、それは一体どういうことなのでしょう？ 生きている者が自発的に死に向かって飾り立てられ、あわれな者たちはその不幸を誇りにさえしています。彼らは野獣と戦っていますが、それは犯罪を犯したためではなく、彼らの狂気によるのです。父親たちはその息子を眺め、その兄弟も姉妹も観客席に来ています。そして豪華な舞台装置がその見世物の入場料を吊り上げるにもかかわらず、母親までもがその悲しみに参加するために、その代金を支払いさえするのです。こうして、これほどひどい見世物、これほど残酷な見世物を見ているのに、彼らは自分が親族殺害者であるということに気付いていないのです。

## 第 8 章 劇場で演じる俳優の不道德な行為、数々の悪行

ここから、他の見世物、即ち、かなり非難すべき悪影響を及ぼしているものに目を向けてください。劇場においても、あなたにとって苦痛であり恥であることを目にするでしょう。古代の悲壮劇、即ち、昔の悪行そのものが詩（の朗読）によって描写され演じられている劇はぞっとするものです。かつて昔に行われたことが時代の経過とともに廃れることのないように、父親殺しや近親相姦に関する戦慄すべき事柄が、迫真の演技をもって繰り返して再現されているのです。かつて昔に起きた出来事は、いつの時代にも起こり得るということが、（詩の朗読を）聞くことによって想起させられています。犯罪は長い年月を経ても、決して消滅することはありません。過去は時代とともに、決して覆い隠されることはありません。悪事は、決して忘却の彼方へと葬り去られることはありません。悪行としてすでに見捨てられたことが、今は模範となっているのです。つまり、人々は家の中で密かに行われたことを再び知ること、またはこれから行うことができる

ことを、悪行の教師である道化芝居役者から聞いて、喜び楽しんでます。姦通は（演劇を）見ている間に学ばれ、また公に推薦される悪行が悪徳に似ることによって、おそらく貞淑な者として見世物を見にやってきた妻も、淫らな者として帰宅することになるのです。

さらにまた、俳優の身振りによって汚されることや、出産の定めや権利に反して行われる淫乱な恥ずべき行為の描写を見ることは、どれほど道徳を汚し、どれほど破廉恥な行為をかき立て、どれほど悪徳を養うことでしょうか。男性たちは軟弱にされ、あらゆる品位は下げられ、性の力は弱められた身体の恥辱によって減退しています。誰かが男性を女性よりも弱めれば弱めるほど、拍手喝采を浴びるのです。罪から名声が増大し、より恥ずべき行為をするほど、より優れていると思われています。そのような人は、ひどい悪行によって喜んで（皆から）見られています。そのような人が説得できないことなど何かあるのでしょうか。彼は五感を刺激し、感情にへつらい、よい人々のかなり健全な良心をも征服してしまいます。しかし、より放蕩的な話を聞くことによって破滅が、つまり人に忍び寄る魅惑的な破廉恥行為の影響が、決して現れないはずがないのです。

この俳優たちは、[古代神話の] わいせつな女神ヴェヌス Venus（英語発音：ヴィーナス）や、姦通する男神マルス Mars（英語発音：マーズ）、悪徳においても権力においても第一人者である男神ユピテル Juppiter（英語発音：ジュピター）を演じるのです。俳優は、ユピテル男神を演じるにあって、きらめく稲光を持って地上の愛に燃え上がり、ある時は白鳥の羽におおわれて輝き出たり、ある時は黄金の雨の中を流れ下ったり、またある時は成長した男の子を略奪するために、鳥の助けをかりて飛びかかったりします。さて、ここで、このようなものを見る者が、果たして完全無欠な者、羞恥心のある者であり得るでしょうか、尋ねてみてください。人々は自分が敬う神々を、真似るものです。あわれな者には、その犯した罪が自分の宗教になるのです。

## 第9章 羞恥心のある者には耐えられないことが行われている

ああ、もしもあなたがあの高い展望台に立たされて、その目を秘密なことに向け、寝室の閉ざされた扉を開け、さらに隠された奥の部屋をうかがい知るために目をあけることができさえすれば、羞恥心のある者には見るに耐えないことが、猥褻な者によって行われているのを見ることでしょう。また、見るだけでも罪になるようなことを見たり、悪徳の熱狂によって目がくらんだ者が行った行為を否定しながら、また行おうと急いでいる姿を見ることでしょう。狂気の情欲から男が男に飛び掛かります。こういうことを行う者にも、決して好ましく有り得ないことが起こります。こういう者を他人がとがめないならば、私は嘘つきとなるでしょう。

不道徳な者が不道徳な者をののしり、自分は罪意識が足りないかの如く、彼自身は罪を自覚して逃れていると思ひ込んでいます。同一人物が公の告発人であり、隠れた被告人でもあるのです。自分自身に対して監察官であると同時に、犯罪人でもあるのです。つまり、心の中で行う行為を、そとでは有罪と宣告し、他人がそれを行った場合、罪に帰することを、うちでは自分自身、喜んでやっているのです。大胆不敵な者は悪徳行為に加担し、猥褻な者は猥褻な者と共に集まっています。このような類の者が語ることに、あなたが驚かないようにと、私は望みます。それは、彼らが口から吐く言葉によって犯されるどんな罪も、まだまだ軽いものだからです。

## 第10章 公共広場での悪行の数々も何の恥じらいもなく……

しかし、危険で物騒な公道をあとにして、全地に散乱した多様な戦争のあとで、血染の残酷な見世物あるいは破廉恥な見世物のあとで、罪が密かであればあるほど、いっそう大胆不敵なものであり、また遊廓で身を委ねたり、家の壁に密閉された淫乱の破廉恥行為のあとで、挑発的な不正行為から免れ、諸悪の影響に汚されていないフォーラム（Forum 公共広場）はおそらく関わりのないものだと、あなたは思われるでしょう。そこへあなたの目を向けてみてください。そこにはいっそう嫌悪すべきものを見出し、

目をそむけるでしょう。そこでは12の掟が書き板に刻まれ、権利は公に備えられた銅板に掲示されているにも関わらず、掟の中でさえ悪事が行われ、権利の中でさえ罪が犯され、しかも弁護されています。逆に、清廉潔白（無罪）はそこでは保護されていないのです。不和な者たちは狂乱して相互に暴れ回り、トーガ（訳注。もともとはローマ市民が平和な時に着用した衣服の名）着用の時に、平和が破られ、フォーラム（公共広場）で人々は狂気の訴訟のためにわめきたてています。そこには槍や剣があり、刑吏がいて、〔拷問のために手足の〕爪を引き抜いたり、〔体を〕馬の形をした拷問台に乗せて引っ張ったり、火で焼き焦がしたりしています。一人の人間の体のために、五体よりもたくさんの拷問道具が用意されています。

このようなことが行われている時、誰が助けに来てくれるのでしょうか。法廷弁護人ですか？ 彼は義務を果たさず、欺くだけです。裁判官ですか？ 彼は判決を、売り渡します。罪を罰する者が罪を犯し、無罪の被告が減びるために、裁判官が犯罪人となるのです。どこでも犯罪が燃え上がり、至るところで多種多様な犯罪方法に従い、不正な心の持ち主に有害な毒がはたらきかけています。ある者は遺言状をすり替えたりします。他の者は死に値する欺瞞をもって、文書偽造をやっつけます。こうして、一方では実の子どもにその遺産〔相続〕がさえぎられ、他方ではよそものに財産が贈与されるのです。敵対者は嫌疑をかけ、ざん訴者は攻撃し、証人は中傷します。お金で雇われた〔娼婦のような〕声で、金目当てのずうずうしい者が、罪を偽るために至るところで闊歩しています。犯罪人はこうしている間に無罪となり、決して減びないのです。

誰も、掟に恐れを抱かないし、予審判事の前でも、裁判官の前でも、決しておびえたりはしません。つまり、お金で解決できるようなこと（判決）には、別に恐れをいだかないのです。犯罪人の間に無罪でいること自体、もはや罪なのです。

悪い者の真似をしない人は誰でも、悪い者を攻撃することになるのです。法は罪と結託し、公に行われていることを許されていることにし始めるわ

けです。不正を行う者に有罪判決を下す者が現れず、有罪判決を受けた者だけが、あなたに出会うような、そういうところに、どんな訴訟の恥じらいがあり得ましょか、どんな清廉潔白(完全無欠)があり得ましょか？

## 第 11 章 へつらう者の悪意の毒が隠されている

しかしながら、私たちは、恐らく、最悪の事柄を選択し、酷評しようとする熱意をもって、また悲しむべき忌まわしい光景がよりよき良心の持ち主の顔と表情をそこなうような事柄によって、あなたの目を引こうとしているように思われるでしょう。そこで私はあなたに、この世の無知な者だけが良いものと思っている事柄を示したいと思います。そこにも避けなければならない事柄をあなたは認めることでしょう。即ち、それが榮譽だとか、権標(ファスキス)だとかと思っているもの、またそれが富における過剰[蓄積]、陣営における権力、高位管理職における深紅色の姿、最高指揮権における権能だと思っているものには、すべてへつらう者の悪意の毒が隠されています。また、悪徳者の笑顔は確かに喜んではいますが、そこには隠された災いをおびき寄せるための、ごまかしが潜んでいます。ある種の毒に似た液体の中に甘味を加えることによって、狡猾にだまそうとして、つまり味が良くなった液体は摂取できる飲料だと思い込まれて、一気に飲み干されるところに破滅が訪れるのです。

確かに、人目を引き輝いていたために、豪華絢爛たる衣装を身につけ、深紅色の衣をまとっている者を目にするでしょう。輝いているためにどれほどの軽蔑をもってその衣装を買ったことでしょう。すでにどれほどの不遜な者の僭越・傲慢を耐え忍んだことでしょう。傲慢な者の門前に、何と多く、朝の挨拶をする者が取り囲むことでしょう。何と多くのふくれあがった屈辱の歩みが、かつて被保護民の群れに密集し、先立って進んでいったことでしょう。また今後も、人物ではなく権威に服従するために列をなして、自分自身の前にも随行者が、敬意を表するために先立って進んでいくことでしょう。その人が尊敬されるのは彼の行状が相応しいからではなく、



権標（ファスキス）のためだけなのです。

最後に、彼らの恥ずべき終わりを考えてみてください。好機をねらってへつらう者が退散した時、追従者の見捨てた者が、私人の側近不在を辱める時、その時こそ崩壊した家の災いが良心を叱責します。その時こそ、浪費した私有財産の喪失、つまりそれによって群衆の鼻根を買収し、はかなくむなしい望みをもって人望を求めてきたことが暴かれるのです。無益な見世物、娯楽によって、人々に受けることなく、管理職は失うものを得ようと望んだことは、全く愚かな、むなしい損失であったのです。

## 第 12 章 裕福な者は絶えざる不安におびえている

しかし、あなたが、裕福な者と思う人々、つまり、森の牧場に牧場の続く領域から貧しい者を締め出す者や、果てし無く田畑を広げていく者、またひじょうに多くの金塊や銀塊、莫大な金銭を埋蔵したり蓄積したりして所持している者も、結局、それを強盗が略奪しないように、また人殺しが襲撃してこないように、さらには誰かの、より富んでいる者の敵意ある妬みが悪巧みの訴訟によって悩まされることのないようにと、自分の所有する富の不確かさを心配し、気が気でないこの者たちを責めつけるのです。即ち、食事の時も、睡眠の時も、安心出来ずにいます。宴会のさなかにもため息をつき、宝石を散りばめた食器で（酒を）飲むことができて、また美食によって弛緩した体を柔らかい褥（しとね）が深くねりに埋めてくれる時、哀れな者にはひどい責め苦であること、黄金の鎖で縛られていることを、そして所有するよりも富によって所有されていることを悟らず、羽根布団の中で目覚めて横たわっているのです。その上、ああ、呪わしい盲目の心よ！ 狂った欲望の深い暗闇よ！ このような重荷を降ろし自由になることができるのに、なおも締めつける財宝の番をすることを続け、責め苦の固まりに頑固にしがみつくことを続けています。その財宝から被保護民に贈与されることもなく、貧しい者に分配されることもないのです。そして、自分のお金だと言いながら、あたかも他人の物のように家に閉じ

込めておき、不安な気持ちで苦勞してそれを守っているのです。その財宝から、友人にも子どもにも、結局、自分自身にも、分配することなどしないのです。他人が所有することが出来ないように、ただ自分が所有しているだけです。そして、ああ、何と名称（と実体）の逆なことよ！ 彼らは良いものと名付けているが、そこからは悪事のため以外に使われるものなど何もないのです！

### 第 13 章 高位につく権力者の抱いている恐れ

あなたは、王の宮殿のきらびやかさに光り輝き、武器を手にした護衛に取り囲まれた人々を、即ち、少なくとも名誉の頭飾り（インフーラ infula）を着用し、豊かな富による確固不動の状態である人々を、ほんとうに安全であると思うのでしょうか？ 実は、彼らは他の人々よりも、より大きな恐れがあるのです。人々から恐れられている者は、同じように、人々を恐れるように強いられるのです。高位につく者は護衛兵に取り巻かれ、また多くの側近の親衛隊に取り囲まれて安全にみえても、より強い権力者によって、同様に、処罰を受けることにもなるのです。彼は部下たちが安全であることを許さないのと同様に、自分も安全であることができないのは当然のことです。その権力を皆に恐るべきものとする者は、自分自身を恐れなければならないのです。つまり、彼は凶暴になるために微笑し、ごまかすためにへつらい、剝奪するために高い位に上げるのです。地位や名誉のすべてが、より大きければ大きいほど、損害を加える高い利子によってますます大きな処罰の利子が求められるのです。

### 第 14 章 神の賜物である再生の恵み、そのありさまと喜びについて

それゆえ、人はもしもこのような煩わしいこの世の渦巻きから引き出され、救いの港の波止場に落ち着いたならば、唯一の、深い、確かな平穩無事が、また唯一の確固不動の安全が訪れるでしょう。目を地上から天上にあげ、神の賜物に向かうことがゆるされ、心の中では自分の神にすでに接

近してみると、かつては人間的な事柄において他の者より秀でていて偉大と思われていたことはすべて、自分の意識の中ではるかに下のほうに横たわっているのを誇りにすることでしょう。この世より（高められ）偉大なものとなった者は、もはやこの世からどんなものも求めたり、憧れたり出来ません。巻き込むこの世の罠から解放されること、そして地の塵から永遠不滅の光に清められることは、何と堅固で揺るぎない保護でしょう！何と永続的な財産のための天の砦でしょう！

敵対者の狙っている破滅が以前にどれほど私たちに猛威を振るったか、知っておいてもらいたいのです。かつて私たちがそうであったこと〔有罪〕を悟り、認め、そして〔自分に〕有罪判決を下すならば、私たちは将来にそうあるであろうこと〔救いの実現〕をいっそう愛するように駆り立てられるでしょう。この目的（達成）のためには、最も高い地位とか権力が、努力と労苦の末に獲得できる代償、野望、労働などは一切必要ないのです。それは無報酬で、容易にいただくことのできる神の賜物なのです。太陽は自力で光を発し、日は照り、泉は潤し、雨は滴り落ちるのと同様に、天の霊〔聖霊〕は自ら私たちに注がれるのです。私たちの魂は天を仰いでその創造主を知った時、その存在があると信じられていることは太陽よりも高く、またこの地上のすべての力を越えて存在しはじめるのです<sup>7)</sup>。

## 第 15 章 激励の言葉

あなたは、ただ天の軍勢が精神的な陣営のために印をつけたものを腐敗しないように保ちなさい。そして、宗教上の意味での徳の力をもって、健全な規律を保ちなさい。あなたは時には熱心に祈り、時には読書をするようにしてください。神と語るその時こそ、神があなたと共におられます。神があなたにその戒めをもって教え、導いてくださいます。神が豊かな者とされたその人を、貧しい者にすることなど誰にもできません。というのも、ひとたび天の糧に満たされた者の心は、もはや決して欠乏を感じることもなど有り得ないからです。黄金で飾られた天井、高価な大理石で被われ

た家など、あなたには詰まらなく思われることでしょう。というのも、あなたはさらに入念につくり上げるべきでも、それは自分自身であり、また、さらに飾るべきものも自分自身であることを悟ったからです……。また、神殿として神が住まわれたところは、まさにそこであり、そこにこそ聖霊がその住処を備え始めたのであり、この家こそ、より大切なものだと、悟ったからです。この家(魂)を清廉潔白の色で美しく飾りましょう！ 正義の光をもって輝かせましょう！ これらは長い年月を経過しても、決して崩壊することはありません。塗り壁の色があせたり、飾りの金が古びてしまっても、その家は醜くなることはありません。虚飾の物はすべてはかないものであり、真の所有物でないものは、所有者に確固たる信頼を与えません。しかし、この家は生き生きとした美しい飾りをもって、完全無欠な栄誉をもって、神の輝きをもって、存続し続けるのです。消滅されることもなく、粉碎されることもなく、ただ体が元の状態を回復することによって、なおいっそう良いものへと変容することができるのです。

## 第 16 章 結び。救いの喜びのうちに過ごそう！

いとも親愛なるドナートゥスよ、差し当たり、簡潔に、これまでにしましょう。というのも、たとえやさしい忍耐と、神における確固不動な心と、救いへの安全な信頼とを、好意をもって〔私の話を〕聞くことによって楽しんだとしても——神に喜ばれること以外にあなたの耳に喜ばれることなど何もないのですが——たとえ、共に結ばれ、同時に、これからもより頻繁に話しをする私たちは、発言すべき内容を制限しなければならないのです。というのも、今は休日の休養のひと時、暇な時ですが、太陽はずでに傾き、夕暮れまでの残されたこの日がどうであれ、喜びの内に過ごしましょう。天の恵みなしに宴の時を過ごすことのないようにしましょう。慎ましい宴において詩編を歌いましょう！ あなたの確かな記憶と響く歌声によって、いつものようにこの務めを始めましょう！ 私たちに精神的〔霊的な〕なことを聴き分ける耳があれば、そして、宗教的な〔敬虔な〕調べ

が耳を楽しませるように誘うならば、あなたはいとも愛する人々をますます楽しませることでしょう。

(以上、キュプリアヌス『ドナートゥスに送る』——神の恵みと回心について——翻訳おわり)

### III 結びにかえて

#### 1. 本書の今日的意義について

本書『ドナートゥスに送る』Ad Donatum (略語 DO)、「神の恵みと回心について」は、修辞学の教師で弁護士であったキュプリアヌスが回心し洗礼を受けて後まもなく(246年)著した「自分史的な作品」で、ラテン語で書かれている。全体は16章からなり、彼の他の著作に比べて短めであるばかりでなく、具体的で、わかりやすい。

また、本書はアウグスティヌスのDe Confessione『告白録』の先駆的な作品とも言われている。キュプリアヌスは本書では、カトリック信者になる前の「自分の過去」を振り返えることから始めている。当時の社交界での派手な生活をはじめ、仕事に精励していても心が満たされない状態から、師カエキリウス Caecilius との出会いによって信仰に導かれ回心するに至った経緯等を如実に物語っている。また当時のカルタゴ市の様子、エリート社会の風潮、不道德な風習、生活状態にも言及している。

当時の状況は、バブル崩壊後の荒廃した現代日本の社会にも相似している点があり、その意味でも本書の内容には今日的な意義があり、また興味深い。本書では、回心にまで導かれる出会いは、神の恵みによるという点が強調され、回心後の信仰生活の喜びや感謝の心がにじみ出ている。

さらに、上述のアウグスティヌス(32歳)もアンブロシウス司教との出会いによって、洗礼にまで導かれていったのである。この出来事はキュプリアヌスの死後わずか86年位経過した頃のことである。アウグスティヌスはイタリアのミラノ市までやって来てアンブロシウス司教の説教を聞

いて深い感銘を受け、自分の世俗的な生き方を完全に改め、神の恵みによって回心へと導かれた。やがて教会博士として献身的に働き、当時の教会に多大の貢献をしたのである。

## 2. 大聖年にカトリック教会が過去 2000 年間に犯した過ちを謝罪

これは教会の歴史に残る出来事であるので、ここにその詳細をまとめておきたいと思う。大聖年の四旬節第一主日(2000年3月12日)、ヴァチカンの聖ペトロ大聖堂のミサ中に教皇ヨハネ・パウロII世は、教皇としては初めて、カトリック教会が過去2000年間に犯した過ちを謝罪し、謙虚にそのゆるしを求める歴史的な説教をされた。国の内外の新聞・ラジオ・テレビ等のマスコミもいっせいに報道した。翌日3月13日午前6時のNHKラジオ・ニュースで私もこれを聞いて、カトリック教会の頭である教皇が勇気ある謝罪と回心の模範を示したものとして受け止め、感慨深いものを感じた。

日本の主な新聞は休刊日であったが、英字新聞「ヘラルド・トリビューン・インターナショナル」The Herald Tribune International や「ジャパン・タイムズ」The Japan Times は、早速、3月13日付け紙上「一面トップ記事扱い」で、ミサ中の教皇の写真入りで報じた。その後、日本の新聞もこの記事を取り上げていたが、ここでは割愛する。

「ヘラルド」紙一面トップの大見出しは“A Sweeping Apology for Church Errors.”「教会の過ちに対する涙ながらの謝罪」とあり、さらに「教皇、過去2000年間のカトリックの過ちのゆるしを乞う」という小見出し。アレクサンドラ・スタンリー-Alessandra Stanley (New York Times Service)執筆担当者名入りで、2頁に及ぶ長文の記事が掲載されていた。一部抜粋のかたちで以下のとおり翻訳してみた(なお、文中の①～⑦等の数字は訳者の私が便宜上付けたもの)

「我々は謙虚にゆるしを乞う」と教皇ヨハネ・パウロII世は日曜日に、過去2000年間の教会の犯した過ちを悔やみながら、涙ながらの謝罪を教皇

として初めて行った。「ある兄弟たちによって、とくに第二の千年期中に福音に対する裏切り行為が行われたことをわれわれは認めないわけにはいかない。過去の逸脱行為を認識することによって、われわれは良心を現在の事柄に歩み寄るために目覚めさせるものである」。また、教皇が繰り返し、繰り返し述べたことは、第三の千年期のための新しい福音宣教というものは、教会規模での「記憶の清め」が行われないうちで実現しない、ということだ。この謝罪行為の宗教上の意味を強調するために、5名の枢機卿と2名の大司教、合計7名が教皇の前に立ち、各々がカトリック教会の犯した罪を、過去と現在にわたって指摘した。即ち、①宗教上の不寛容、②ユダヤ人、③女性、④先住民族、⑤移民、⑥貧しい者、⑦生まれなかった胎児に対する罪を、逐一指摘した。教皇はまた、他の宗教信奉者によってなされたカトリック教徒迫害についても言及し、「われわれは犯した罪のゆるしを求めるのと同様に、われわれに対して犯された罪をゆるします」と言明した。

教皇就任当初、その厳しい態度は、ソヴィエト連邦、東ヨーロッパ、ラテン・アメリカに向けられ、また人間の基本的な人権侵害や資本主義的経済の不正に対しても挑戦的な態度を示した。しかし今やその在任期間のたそがれの中で取り扱われたこの謝罪は神学的な内容であり、むしろ大胆なものでさえある。新しい千年期のため教会の良心を清めようとする努力に対しては、すでに批判の声も上がっているが、これはかなり明確に記された彼の遺言であることはほとんど確かである。

「謝罪はただ個人的な事柄だけでなく、教会全体として適用するものであり、このことがきわめて大切である」とロレンゾ・アルバセテ Lorenzo Albacete 師（ニューヨーク、Yonkers にある聖ヨゼフ神学院の神学教授）は述べている。

また、同日付のヴァチカン発の「ジャパン・タイムズ」(Los Angeles Times 経由)の記事によれば、教会が犯した主な過ちは、①十字軍の聖戦、②インクィジチオ（ラテン語 Inquisitio：尋問法廷）による異端者・非カ

トリック教徒の処刑，③アフリカやアメリカの先住民族に対する強制的な改宗などであった。また現代の罪については，①世俗主義，②民族的相対主義，③生命の権利侵害，④貧困への無関心，そして⑤教会の顔を傷つけた他の諸悪に対する責任について，教皇はカトリック教徒に猛省を促している。

79歳になる教皇は，痛悔を表す濃い紫色の祭服を身に着け，車付の台に乗って超満員の大聖堂内を通過して祭壇まで運ばれた。そこで，教皇は銀の杖につかまりながら，パーキンソン病のため手を震わせながら，説教の原稿を読み上げた。

四旬節第一主日のミサは，「エルサレム・聖地巡礼の旅1週間」（これは新しいミレニアム聖年行事のもう一つのハイライト）の出発8日前の大きな出来事であった。

### 3. 大聖年2000年のローマの復活徹夜祭（2000年4月22日）の洗礼式

教皇ヨハネ・パウロII世はヴァチカンの聖ペトロ大聖堂で大聖年2000年の復活徹夜祭の洗礼式を司式された。鈴木浩氏（ローマの日本大使館・一等書記官）とその家族（映子夫人と4歳の娘）は日本代表として特別に選ばれ，教皇より洗礼を授かった。その時の光景で，和服姿の娘から挨拶を受ける教皇の写真がなんとも微笑ましかった（「カトリック新聞」2000年5月21日号参照）。

この夫人の手記によれば，中高時代はいわゆる反抗期で，キリスト教など敬遠気味であった。結婚後，娘が誕生，やがて自分が病魔に襲われたが，病気になる友人たちが自殺していく中で，なんとか自殺の誘惑から脱出できた。それは，名古屋のミッション・スクール中高時代に学んだキリスト教の「自殺を禁じる教え」のおかげであった，という。

洗礼を受ける決意をした時点で，その中高時代の先生に洗礼の代母を依頼した。実は，ご主人も，京都のミッション・スクール出身である。こうして，中高時代から約20年が経過した2000年の復活徹夜祭に，教皇より



洗礼の恵みを受けたのである。これこそ、まさにキュプリアヌスが説いている神の恵みによる回心の現代版であるといえよう。

#### 4. 日本の教会における復活徹夜祭の洗礼式

西暦 2000 年の大聖年、立ち上がって父である神のもとに帰還することを、即ち、「反省・回心・祈り・学び」に励む恵みの年を迎えた日本の教会においても、復活祭やクリスマスには全国各地で、洗礼の恵みに与かった人も少なくないと思う。ちなみに、共同司式司祭の一人として参加した、名古屋の南山教会では、2000 年の復活徹夜祭(4 月 22 日)の典礼中、32 名の洗礼式が行われた。各人が大人としての自覚をもって授かる洗礼の秘跡は、基本的には、先手を取ってくださる神の導きと招き、即ち「先行的な恵み」によるものであるが、具体的には、その手助けとなったキリスト者(信徒・修道者・教師・司祭など)との出会いや、種々の出版物、生死に関わるような出来事がきっかけになっているケースも案外多いことであろう……。

現代日本のカトリック信徒、とくに洗礼後あまり歳月の経っていない人々にとって、異なる価値観等に対抗して、キリスト教的価値観、倫理観を堅持しながら、子どもの宗教教育、日曜日のミサ参加、宗教上の義務遂行等に際して、困難や悩みを抱え、心の葛藤に戸惑いを覚えている人も少なくない。あきらめたり、信仰を捨ててしまう誘惑と戦っていくためにも、洗礼後のアフター・ケア、霊的ガイダンスがいっそう不可欠なものになってきている気がする。

南山大学在学中に洗礼を受け、カトリック教国アイルランドに留学し、帰国後の勉学も無事修了、2000 年 3 月に卒業して行った女子学生 K さんは、卒業前の 3 月初旬、私宛の手紙の中でこう述べている。「……私は現在、就職が決まりましたので母の実家で暮らしております。病院勤務で(事務ではありません) 昨年の夏から見習いがてら働いています。今までの環境とは異なり、価値観も考え方も違う人達と働くにあたり、人間関係や医療

現場の実状を知ってショックに思うこともありますが、中には尊敬している人もいて、そういう人達と一緒に働くことが出来ることに感謝しています。……何て世間はえげつないのだろう……とストレスを感じる毎日です。いろいろとこぼしたい話はあるのですが、なかなかそうもいきません」。この手紙はほんの一例に過ぎないが、過去10年間のロゴス・センターでの学生相談室の経験からしても、いろいろとこぼしたい話を親身になって聞いてあげる人々が、大学キャンパス内に必要とされていることは明らかである。

今回、キュプリアヌスが本書で語っている「神の恵みと回心について」の示唆に富む内容は、悩み苦しむ現代の人々にも歩む方向を見直す機会を与え、反省と決心、慰めと希望、元気と喜びを与えてくれるものと確信する次第である。

(以上、本文おわり)

## 註

- 1) Cf. Lexikon fuer Theologie und Kirche, Verlag Herder 1959.
- 2) 北アフリカの教会では迫害の際に教会を裏切った者(棄教者)の復帰に関して、意見が分かれて約100年間論争を続けた。ドナトゥス派は洗礼を受け直すこと、また裏切りの経歴のある司教の施す洗礼や司祭叙階は無効であると主張して、カトリック教会と対立した。ちなみに、ヒッポのアウグスティヌスもこの論争に加わっている。ドナトゥス派はやがて有罪判決を受け、最終的には411年カルタゴ教会会議で法的に禁止されて決着した(この項目については『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局1986参照)
- 3) Cf. The Oxford Classical Dictionary, Oxford 1996.
- 4) 『中世思想原典集成、第4巻、初期ラテン教父』平凡社 1999、「解説」138頁以降参照
- 5) アマン著『教父たち』エンデルレ書店 1973年、92～106頁参照。Cf. A. Hamman, Die Kirchenvaeter, Kleine Einfuehrung in Leben und Werk, Verlag Herder 1967.
- 6) キュプリアヌスの著作(教書)一覧表(作成年代順)。なお、末尾に☆印付の5編

(下記の5. 4. 3. 8. 7. の順)は加筆修正のうえ、上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成、第4巻、初期ラテン教父』平凡社、1999年に約166頁分(137~303頁参照)として収録されている。

- (1) 『ドナートゥスに送る』Ad Donatum (略語DO)。神の恵みと回心について。洗礼直後の246年の著作。『南山神学』第24号、2000年。
  - (2) 『おとめの身だしなみについて』De habitu virginum (HA), 249年。『南山神学』第20号、1997年。
  - (3) 『背教者について』De lapsis (LA), 251年。『南山神学』第10号、1987年。☆
  - (4) 『カトリック教会の一致について』De ecclesiae Catholicae unitate (UN), 251年。『南山神学』第8号、1985年。☆
  - (5) 『主の祈りについて』De dominica oratione (DM), 251/252年頃。『南山神学』第11号、1989年。☆
  - (6) 『デメトリアーヌスに送る』Ad Demetrianum (DE)。キリスト教弁明の書。252年頃。『南山神学』第23号、1999年。
  - (7) 『死を免れないことについて』De mortalitate (MO), 252年。『南山神学』第13号、1990年。☆
  - (8) 『善行と施しについて』De opere et eleemosynis (OP), 252/253年頃。『南山神学』第12号、1989年。☆
  - ★(9) 『忍耐の善さについて』De bono patientiae (BO) 256年。熊谷賢二訳『偉大なる忍耐』創文社1965年(単行本)
  - (10) 『嫉妬と妬みについて』De zelo et livore (ZE), 256/257年頃。南山大学『アカデミア』文学・語学編、第63号、1997年。
  - (11) 『フォルトゥナトゥスに送る』Ad Fortunatum (FO)。殉教のすすめについて。257年、あるいは251/252年頃。『南山神学』第21号、1998年。
  - (12) 『クイリヌスに送る』Ad Quirinum, l. 2. 3. (Q 1. Q 2. Q 3) 全3巻。要理教育に使用した聖書のテキストを記録し、全3巻にまとめたもの。249年以前の著作。翻訳未完。
  - (13) 『偶像は神々ではないこと』Quod idola dii non sunt (ID)著作年不詳。本書は19世紀になってから、H. コッホ (Hugo Koch 1869~1940) によって、キュプリアヌスの著作に帰された教書。翻訳未完。
- 以上のように、★9番目の著作(熊谷賢二訳)を除いて、今回の1番目のものを含めると2000年までの約15年間に、「教書」全13編中10編の著作について翻訳・出版が完了し、残すところは12番と13番の2つだけとなった。
- 7) この箇所は再生の喜びの証言である。前半でキュプリアヌスは異教徒時代の体験から語り、後半では、洗礼による新しい誕生について雄弁に物語っている。